

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録（2014.12）平成25年度:100-102.

がん患者サロン『ほっとピア』の現状と課題－自分を取りもどす力を引き出す看護師のエンパワメント－

田中 理佳, 鎌仲 知美

がん患者サロン『ほっとピア』の現状と課題

～自分を取りもどす力を引き出す看護師のエンパワメント～

○田中 理佳^{1) 2)} 鎌仲 知美^{1) 2)}

旭川医科大学病院 1) がん相談支援センター

2) 腫瘍センター

I. はじめに

平成 20 年 4 月地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、がん相談支援センターが設置された。がん相談支援センターには、がん相談支援機能とがん患者や家族が集うがん患者サロン（以下サロン）を運営する役割がある。

平成 22 年 12 月より開設されたサロン『ほっとピア』への参加者は、年々増加傾向にある。この背景には、新聞やラジオ、市民公開講座による広報活動や、平成 24 年より新たに試みたがん患者・家族向けのがんに関する『ほっとピアセミナー』の開催による認知度向上が挙げられる。さらに、同年 11 月よりがん患者の声で開設した子育て中のサロン『ななかまど』や、参加者のニーズに寄り添い、『ほっとピア』らしさを追求したイベントへの取組みを実践してきた。このように、患者と共に協働し築いてきた『ほっとピア』を参加者はどう感じているのか、今後の『ほっとピア』の展望を方向づけるためにも、過去のアンケート結果や利用者のサロンに関する意見・感想を示す言動から評価し、サロンの現状と今後の課題を検討したので報告する。

II. 目的

『ほっとピア』の現状を分析し、今後の課題を導く。

III. 方法

1. データ収集期間：

平成 22 年 12 月～平成 25 年 10 月。

2. 調査対象：『ほっとピア』参加者。

3. データ収集・分析方法：

開設当初からの『ほっとピア』参加者名簿から、参加者の属性を抽出した。アンケートからは、『ほっとピアセミナー』子育て中サロン『ななかまど』で過去に調査した【ほっとピアへの意見・感想】の記述結果と、サロン内で交わされるサロンへの意見・感想を示す参加者の言動を抽出した内容を、がん相談員 2 名で解釈をし、意味内容の類似性によりカテゴリー化した。さらに、カテゴリー同士の関連性を明らかにするため構造化した。

IV. 倫理的配慮

本研究のアンケートは無記名で、記入した内容により個人が特定されることはない。又、本研究の目的以外に、回答で得られた情報を使用しない。

V. ほっとピアの概要

『ほっとピア』は、毎月第 24 金曜日に開催し、第 4 金曜日の午後から 30 分間のがんに関するテーマを設けた『ほっとピアセミナー』を開催している。セミナー後は、テーマに興味を持ち集まった者同士で、語り合う場を設定している。平成 24 年 11 月からは、サロンの参加者の声からはじめた子育て中サロン『ななかまど』を開設。毎月第 3 火曜日に開催をしている。さらに、サロンの中で交わされる会話の中からニーズを拾い上げ、サロン内のイベントとして、企画・実施へ導く取組みを行っている。

表 1. 平成 25 年度 ほっとピア企画セミナーとイベント

日時	ほっとピアセミナー	テーマ・講師
4月	腫瘍マーカーの見方	臨床検査副技師長
5月	痛みをやわらげて快適に過ごすために	緩和ケア認定看護師
6月	婦人科がんとお話	産婦人科 講師
7月	がんとお金のお話	医療ソーシャルワーカー
8月	グリーフケアのお話～がんでご家族や知人を亡くされた方へ	緩和ケア診療部 副部長 医師
9月	肺がんとお話	呼吸器センター 助教 医師
10月	食事に困った時のヒント	栄養士長

日時	ほっとピアセミナー	テーマ・講師
6月	『週末サロン』 患者同士の支え合いの場を利用しましょう	腫瘍センター看護師長
8月	子育て中サロン『ななかまど』主催 夏休み特別企画 『七夕の会』	旭川医科大学 看護学科 演習室
9月	子育て中サロン『ななかまど』主催 院内コンサート 乳がん患者のエレクトーン演奏 がん患者のご家族による大正琴演奏	

VI. 結果

1. 『ほっとピア』参加者の属性

開設当初から現在に至る『ほっとピア』、『ほっとピアセミナー』参加者は、平成 22 年 12 月から 3 月まで 28 名。平成 23 年度 91 名、平成 24 年度 238 名（セミナー参加者 155 名を含む）、平成 25 年 10 月までの参加者は

257名(セミナー参加者113名を含む)であった。『ほっとピア』全体の参加者内訳は女性86%、男性14%。年齢は、20～30代が8%、40～50代が52%、60～70代が38%、80以上が2%であった。参加者は患者本人が78%、家族・知人が22%であった。がん種は多い順に、乳がん53%、子宮・卵巣がん12%、肝・胆・膵は10%、前立腺がん8%、肺がん6%、5%未満ではあるが、胃がん、大腸がん、食道がん、耳鼻咽喉がん、甲状腺がん、リンパ・血液がん、膀胱がん、皮膚がんの参加もあった。

2. 『ほっとピア』への意見・感想・評価

アンケートと参加者の会話から抽出された内容から、34のコード「」、9つのサブカテゴリ〈〉、5つのカテゴリ【】が抽出された。

1) 【がん患者同士の交流で得る満足感】は、「気持ちや感情を出せた」「胸のつかえが取れた」「来て良かった」「すっきりした」「励まされた」「パワーをもらえる」の〈出会い・交流で得る前向きな思い〉と、「ここに来ると社会から自分をリセット出来る」「友だちや家族にはわからない。ここに来るとわかってもらえる。病気を体験した人でないとわからない」「同じ境遇の人と話せてうれしい」「自分だけじゃないと認識出来る」〈サロンだから得られる共感〉の2つのサブカテゴリから構成されていた。

2) 【看護師がいる安心感】は、サロンの場が「看護師との信頼関係を構築する礎」「看護師の親切・丁寧な対応」の〈看護師の存在価値〉と、看護師の気配り・意欲・誠意・寄り添いが良い「居心地が良い、和やかで温かい雰囲気」の〈安心出来る環境〉と、「相談出来るのがうれしい」「聞きたいことがタイムリーに聞ける」の〈看護師による相談機能〉で構成されていた。

3) 【がんに関連した知識・情報の獲得】は、「情報・経験が不足している。情報が欲しい」「セミナーは学びになる」と〈がんを学べる〉環境が抽出された。

4) 【ピアサポートの実現】は、「参加する人が増えてほしい」「ピアサポートをしたい。支えたい」の〈他のがん患者の役に立ちたい〉思いから構成された。

5) 【参加しやすい環境】は、「週末が良い」「曜日を変えて欲しい」「開催頻度を増やして欲しい」「来たいと思ってもらえるよう、場の雰囲気を伝えたい」「勇気がなく参加出来ない人に来てもらいたい」の〈参加しやすい状況設定〉と、「遺族の会も継続してほしい」〈参加したい内容〉から構成されていた。

Ⅶ. 考察

『ほっとピア』への参加者は、平成24年の『ほっとピアセミナー』開始と共に増えている傾向があった。平成23年度の参加者と比較し約2.6倍増という結果や『ほっとピア』参加者のうち、『ほっとピアセミナー』参加者の割合が約55%と高いことにも裏付けられている。さらに、参加者属性は、男女比が約2:8、年齢層は40～50代の割合が多く、疾患別では乳がんが多い傾向にあった。これは、全国のサロンの傾向に類似する結果となった¹⁾。

今回抽出された5つのカテゴリは、結果の1)～4)の4主要カテゴリに類型化され、それぞれのカテゴリを経験することで、「自分をとりもどす力を引き出す」方向へ導く構造が明らかとなった。

安梅は²⁾「ピア・エンパワメントとは、仲間と一緒に元気になる、力を引き出し合うこと」と述べている。同じがんという疾患を持ち、類似する境遇を持つもの同士の出会いと交流は、語る、聴く of 双方向のコミュニケーションから、〈サロンだから得られる共感〉〈出会い・交流で得る前向きな思い〉を経験し、この経験が、『仲間と一緒に元気になる』『力を引き出し合う』ピア・エンパワメントのプロセスになり、【がん患者同士の交流で得る満足感】につながるものと考えられる。看護師は、『ほっとピア』内での参加者同士の出会いと交流を見守り、双方向のコミュニケーションによって、ピア・エンパワメントが機能するよう支援する役割がある。

『ほっとピア』の強みは、看護師が常駐していること、いつでも相談出来る〈看護師による相談機能〉を保障していることにある。〈安心出来る環境〉と評価を得ていることから、『ほっとピア』を支える機能と言える。森は³⁾「患者・家族のそばに寄り添い、自分を見つめる時間につきあうことは、支援者の存在を示すことになる」と述べている。『ほっとピア』の一連のプロセスを見守る看護師の寄り添いが、〈看護師の存在価値〉として評価され、参加者を支える【看護師がいる安心感】につながっていると考えられる。

『ほっとピアセミナー』は、『ほっとピア』へ参加を促すきっかけとなっている。看護師は、がん相談内容と『ほっとピア』で交わされる会話から、ニーズを把握し、『ほっとピア』イベント企画や『ほっとピアセミナー』のテーマに反映させている。これは、『ほっとピア』を企画運営する看護師と、『ほっとピア』の参加者との協働関係の形成につながっていると言える。『ほっとピアセミナー』が支持されていることは、【がんに関連した

知識・情報の獲得】のための環境へのニーズを裏付けるものであると言える。

『ほっとピア』には、コアメンバーとして存在する参加者がいる。サロンでの自分自身の体験を他の患者に役立てたいという思いを抱いている。森は³⁾「同じ病に対処している仲間存在は心強く、自分も他者を助けることで、自分の存在価値を見出す体験になる。」と述べている。看護師は参加者それぞれのニーズを把握し、ピアサポートをしたい意志を持つ参加者へは、意図的に力を発揮出来る機会を設定し、協力が可能か否かを自己決定してもらう。その機会を見守り、力を発揮し取組んでいることを肯定的にフィードバックし、自己の取組みに自信がもてるようエンパワメントしている。今回抽出された4主要カテゴリーが相互に作用しあい、看護師はこのプロセスに寄り添い、見守り、支持していくことで、《自分をとりもどす力を引き出す》ことへとつながっていると言える。今後は結果5)のカテゴリーである【参加しやすい環境】のニーズから、『ほっとピア』の可視化に工夫を加え、潜在的に参加を考えている人たちに、この場の雰囲気が伝わるような広報のあり方を検討し、「行ってみよう」と思える安心感を感じてもらえるような場を提供していきたいと考える。この取組みを、参加者と協働し育てていきたい。

Ⅷ. 結論

参加者が『ほっとピア』に抱いている意見・感想には、【がん患者同士の交流で得る満足感】【看護師がいる安心感】【がんに関連した知識・情報の獲得】【ピアサポートの実現】の4主要カテゴリーが抽出され、これらの体験や相互作用は、看護師による寄り添い・支持的対応・見守りによってエンパワメントされ、《自分をとりもどす力を引き出す》ことにつながった。

Ⅸ. 参考文献

- 1) 北村 周子：行政が開設する地域がん患者サロン，2012年がんサロンに関する会議報告書，P54-60,65.
- 2) 安梅 江：エンパワメントのケア科学，P23-26，医歯薬出版株式会社，2007.
- 3) 森 文子：患者の心理的支援とエンパワメント，ステップアップがん化学療法看護，173-178，学研メディカル秀潤社，2010.